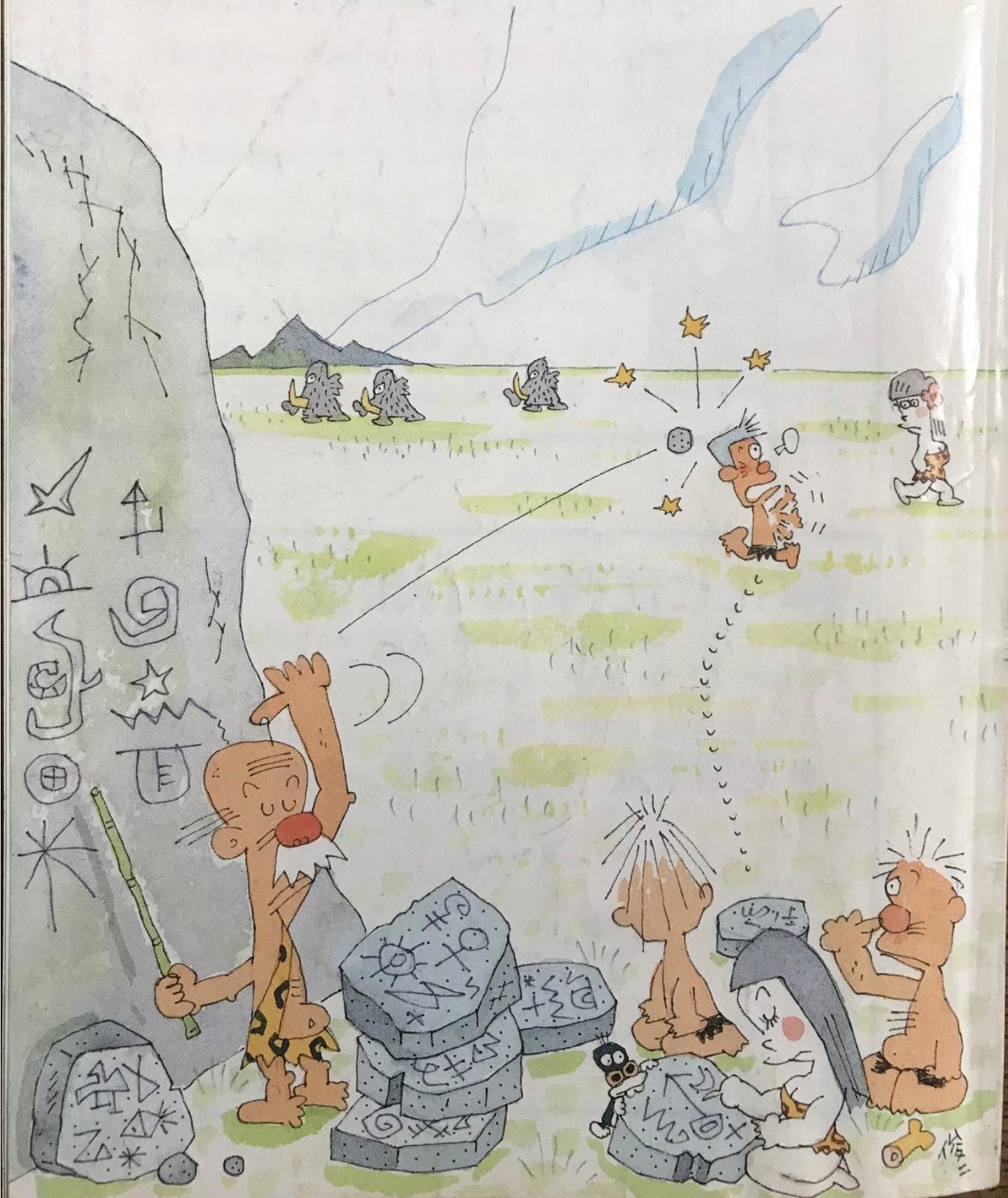


昭和22年9月27日第三種郵便物認可 復刊第43巻 第4号(通巻992号) 平成元年5月15日発行(毎月15日1回)

早稲田学報 '89 5



知られざる国・オーストラリア

★筆者は一九八一年から一九八六年までオーストラリアに駐在した



鈴木 勝

(JTB日本交通公社北京事務所長)

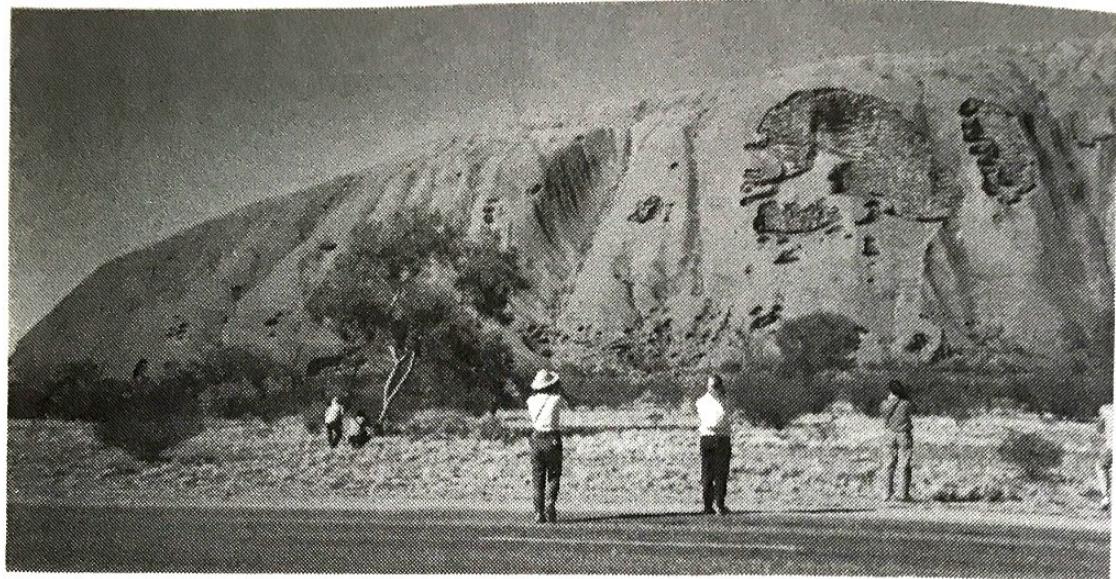
最近、南半球のオーストラリアからのニュースがずいぶんと増えた。コアラ、カンガルーの愛らしい動物たち、グレートバリアリーフやエアーズロックの雄大な自然の景観、そしてシドニーやメルボルンなどの街角でふれあうオーストラリア人の素朴で陽気な性格な

ど……テレビ、雑誌や新聞でいろいろ紹介されるようになつた。しかし、私がシドニーに駐在した年——一九八一年——の八年前は豪州はまだまだ南半球の遠い国の一つであつた。五年近く駐在している間にそのオーストラリアは大きく変わつていつた。日豪間の航空機の

増便に比例して両国のパイプは急激に太くなつた。政治、経済、文化等の各分野で拡がつていつたが何といつても観光の分野、即ち旅行客の豪州への流れは激しかつた。最近の海外旅行ブームの中にあって、遂にオーストラリアはハネムーン客にとつてハワイを抜いて、最も魅力あるデステイネーションとなつた。これら旅行客相手のガイドブックや紀行文の類は増えたが、豪州のライフ・スタイルの紹介は欧米に比較するとまだまだ少ない。本稿では誌面が限られ充分ではないが少しでも「知られざる国・オーストラリア」を日常の身近なトピックスを通して紹介したい。

オーストラリアは「労働者王国」といわれる。その「王国」のいわれは「労働時間の短かさ」と「休暇制度」に由来する。前者はどこかの国が土曜日が休みになつたとか大騒ぎしているが豪州はとつくる昔に週休二日となつてゐる。週三十五時間が取り沙汰されてゐる。更に後者の休暇制度が“バラ色の王国”とならしめている。法律によると年間、四週間が保障されている。加えて“長期有給休暇法”なるものも存在し、十年以上勤務した場

台には六週間、十五年以上の場合は十三週間以上と規定されている。この規定にしたがつ



エアーズロック

てオーストラリア人は年間の休暇と長期の休暇を完全にそして実に計画的に二～四週間をまとめて消化することである。日本のように有給休暇が翌年に何日も繰越されたり、買上げされたりすることはほとんどない。これらの休暇規定に驚いてはならない。更に驚きは次の制度である。「ホリデー・ペイ・ローディング」と呼ばれるものである。わかりやすくいえば「お休み手当」である。普段の給料の「17・5%相当分」で休暇の際に前払いされるものである。またこれは所得税控除対象となっている。ホリデーをエンジョイするには軍資金が必要であろうとの「おかみ」のあたかい配慮なのである。日本にもこのようないい配慮があれば、休日は増えたが資金がなく、テレビの前でゴロリとヒマつぶしをする光景は少なくなるであろう。駐在期間、社員の給料を支給する責任者として、「お休み手当」の小切手を手渡すたびにいつも複雑な気持になってしまう。我々、駐在員の給与は東京本社の給与規定でがんじがらめで、「17・5%」を上乗せなんてまったく不可能。上乗せどころか休暇もままならぬ状態が現実でもあ

つた。

さて、「四週間のホリデー」といえば、一ヶ月となる。したがつて、一年の内、かなりの間職場を離れるわけである。仕事の進行には関係の相手先は勿論、自分の会社でも休暇を考慮したゆとりある計画を作らなければならぬ。日本側から案件について度々、督促が来る。「相手」又は「自分の会社」の担当者が「ホリデー中」であるなんて言おうものならこちらの詰めの甘さを糾弾されてしまう。休暇なんて二の次三の次である。反面、オーストラリアは「ホリデー」といえば、「ああ、そうですか」といつて納得して引き下がる。日本のように「上司や責任者を出せ!」と意気まいた風景はまず、お目にかかるない。他人の権利を尊重することは自分の権利の主張につながると考えているのだろうか。

とにかく、「ホリデー」については現在、日本人が懷いている観念をオーストラリア人を見習つて修正しなければならないと考えつても、現実的には日豪の橋渡しをしている日本人駐在員にとつては禁句となつていて、仕事に関連してこんな規定がある。

「残業」「土・日曜・祝祭日の業務」に対する支払いに関するものである。「通常日の時間外及び土曜日の午前中の就業については通常の時間の一・五倍を、土曜日の午後及び日曜日は二倍、そして祝祭日はなんと二・五倍を支払うこと。」となつてゐる。企業経営者にとって大変な負担になつてゐることは事実である。しかし、現実にはよほどのことがない限り、オーストラリア人は残業や土・日祝日出勤は行なわない。たとえ、二・五倍の手当を貰つてもオーストラリア人にとって魅力とは感じていかない。むしろファミリー・ガールフレンドとのアウティング（外出）の方が何倍もの魅力なのかもしれない。

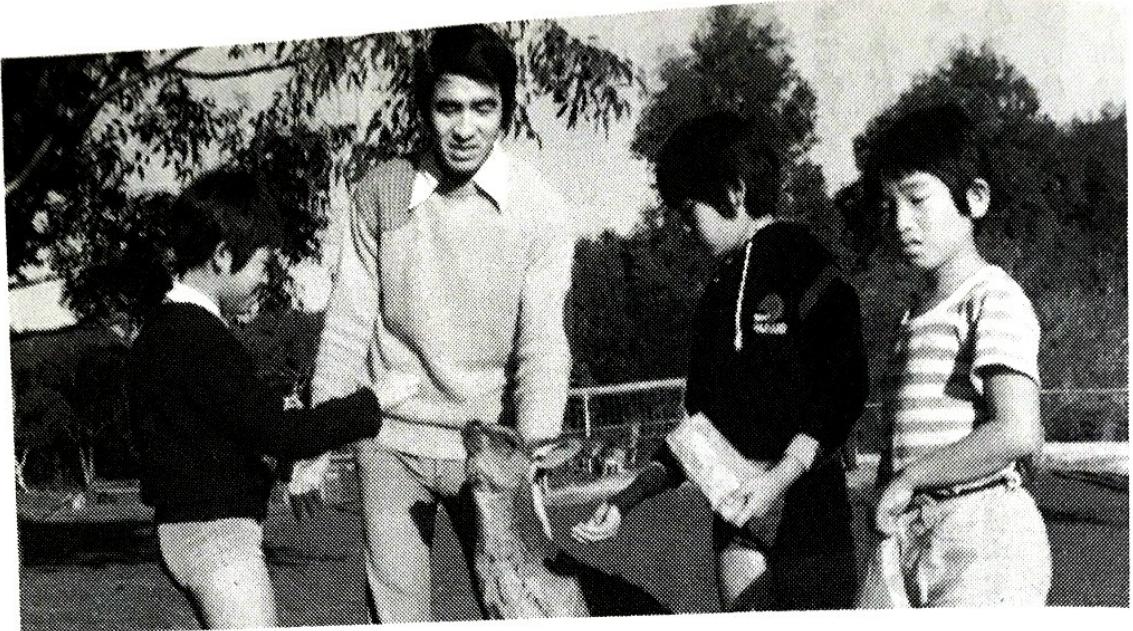
仕事のことを述べたついでに「転勤」や「転職」はどうなんだろうか？これらがまた日本人にとって興味深い。わずかな企業を除いて都市をまたがつた転勤はほとんどないのがオーストラリア転勤事情である。ある会社で本社をメルボルンからシドニーに移す段になり、大勢のスタッフの配置替えが必要になつた。シドニー行きを募つたところ、退職者が続出したというエピソードも豪州らしい。終

身雇用の感覚は極端に薄い。不思議なことに会社の都合での引っ越しはそれ程多くないにもかかわらず、自由意志での引っ越しは誠に頻繁である。日本のように先祖伝来の「家」「土地」の観念が薄い。シドニーなどの都会ではなおさらだ。オーストラリア国内のみならず、海外たとえばヨーロッパなどへ家族総出で引っ越して行く。家・土地に束縛されない自由に動きまわる豪州人スピリッツは遠く二百年前の開拓移民時代の影響を受けているのだろうか。家・土地に拘泥しない精神が就職・退職にも相通じている気がする。土曜版の新聞を見ると企業のリクルート広告が多く出ていて、我が社も履歴書送付をうたつて廣告を出したことも何度もあった。まず、書類選考を行ない、面接となる。合格通知を出し、一週間を経ず入社するのが大部分であった。中には面接日翌日からのスタートもあった。就職も早いが退職も早い。規則で退職通知は会社に対して一週間前の通知でよいことになつていて、同時に企業側からすれば、原則的に一週間の通告で解雇できるルールでもある。とにかく万事悠長なオーストラリアにあ

つて就職・退職のテンポの早さは特筆ものである。仕事関係以外に豪州人気質を一つ。駐在中、朝晩の通勤に郊外電車を利用し、ハーバーブリッジを渡り市内のオフィスまで通つた。この電車のドアをオープンしたままで走ることが少なくなつた。もし、日本であれば線路に落ちけが人や死者が出ればJR等の当局の管理責任が強く追及されることは必定。しかし、オーストラリアは決して空いているわけではないが事故が少ない。乗客自身、危険だナと判断したら無理して乗らず、次の電車を待つからである。他方、州の鉄道局を糾弾するわけでもない。結局は安全に対する心構えが日本人と異なつてゐるからだと思ふ。「安全」とは日本では他人が考えて守つてくれると教育されているらしい。

象徴的であつたことは、“地球のヘソ”と言われるエアーズロック：オーストラリア大陸の中心に位置した世界最大の一枚岩の奇岩：その頂上への道には一本の鎖しかない。左右を見れば、崖である。スリップしやすく、また風も強い。その鎖の手を離せば落命まちが

いなし。現にエアーズロックのふもとには滑り落ち亡くなつた人の碑がいくつもある。こ



ワラタパークにて、カンガルーと

の一本の鎖しかない状態に対し強い非難の声を発するわけでもない。自分の登山の実力または健康に相談すべしとのことであろう。日本にエアーズロックがあれば、登山道の両サイドは二重・三重の安全柵が設けられ、景観は台なしというところだろう。豪州はこれでも継続してこの景観を保つていて、「命は自分で守れ」の精神が強く浸透している一例である。

しかし、こんな気概が昂じて奇妙なクセにもつながっている。オーストラリア人は街角の信号を守らないことである。信号が赤でも左右を見て、大丈夫だなと思えば老若男女を問わず、おばあさんまでもがソソクサと駆け足で横切る風景がアチコチで見受けられる。幸い事故もそれ程発生はしていない。幼児時代から充分、教育を受け渡る頃合を心得ているからなのだろう。

最後にオーストラリア人の食生活について述べよう。最近のオーストラリア人の食事スタイルは大転換を遂げている。かつてはバーベキューが代表とされる豪州料理であつたが「移民の国」に変貌するにつれて世界中の料

理が生活の中に浸み込んできた。ヨーロッパ特に地中海沿岸、中近東の各国をはじめ近年急増しているのは東南アジア諸国の料理である。ミニ・ワールドと称しても過言ではない。シドニーの街の至るところに民族色豊かなレストランが立ち並んでいる。高級というよりかむしろ質素なものが多い。「ティカアウェイ」と呼ばれるスタンンド風レストランが多い。言葉も不自由な移民がまず、生計をたてるのにてつとり早いのが自國の料理なのかもしない。昼食時となれば、あちこちのオフィスから出てきたサラリーマンはこれらのレストランに入る。天気が良ければ近くの公園で特別の抵抗もなく食べている。オーストラリア人は良い物は良い、うまいものはうまいと取り入れる氣概を持つていて。食生活も更に転換していくであろうと思う。他方、ブルーサイドでのビールとワインを加えたバーベキュー・パーティも根強い人気を得ているのも現実である。進取の精神を持ちつつ、伝統を守る氣概は食事のみに限つたことではなく、生活の至るところで見受けられる。